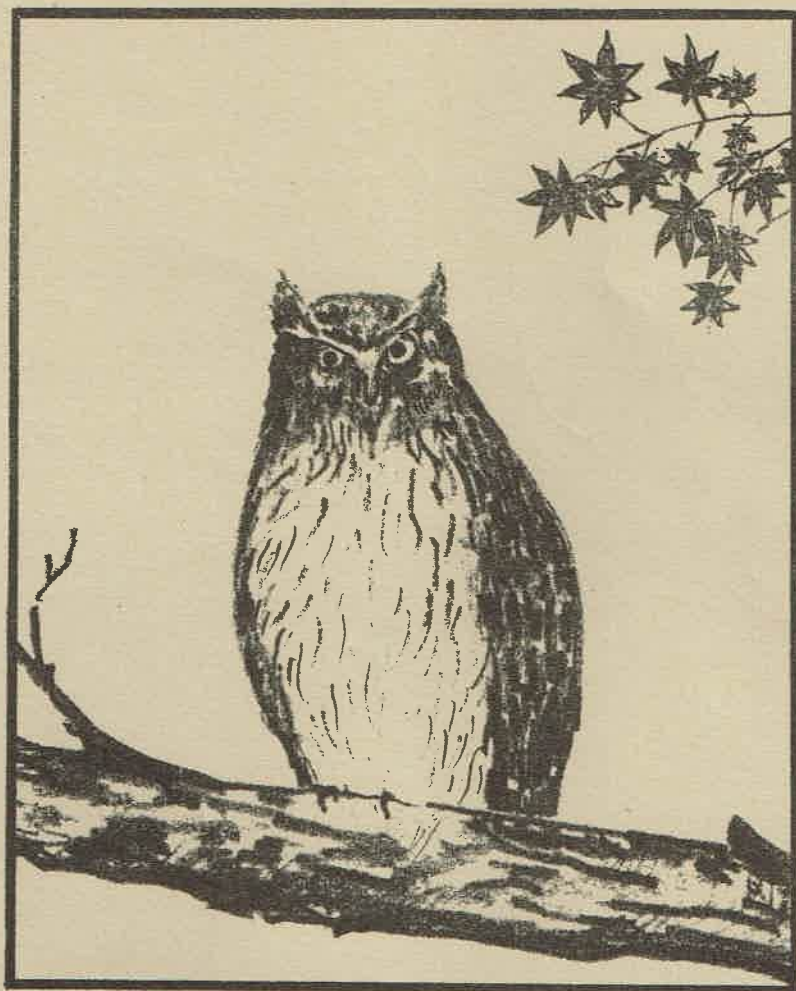


エゾマツ



No. 50

1999. 10. 20

北海道ボランティア・レンジャー協議会

「エゾマツ」50号の発行を祝う

会長代行 川 端 功 治

機関紙の50号とは大変な大記録であって、これは編集製作者の弛まざる努力の賜物であると同時に、これを支えた会員の皆さんの熱意が、この偉業を成し遂げたものと信じています。ここに尊敬と感謝の言葉を贈りたいと思います。

この節目に来し方を振り返って、あれこれと反省するのをもまた、意義あることと思ひ、私達の行事で大切な観察会が、より明るく、より楽しくなる方法は無いものかと模索してみました。

特に私達の本命である観察会で、避けなければならない一つに、分類に夢中のグループがレンジャーを独占して仕舞い、その迫力に気押されて列外に、ハミ出た、立ちん坊が沢山出る事です。次の例は参考になるかどうか私の経験談です。

「この花は、どなたにもお馴染みと思いますが、お復習の積もりで、私の話を聞いて下さい」と話始めたところ、「ダンサン！（旦那さんの意味）その話は以前にダンサンから聞いたワ」。何時も私の前に陣取って、少しく曲がった腰に手を当てて、私を見上げるようにして、元気良く発言する常連の奥さんが居ます。

歳の頃なら80歳前後か。私に取っては得難い、貴重なファンと言うべき方でありましょうが、話の腰が折れて一瞬たじろぐと、そこは良くしたもので、何方から助け船が出されます。「奥さん！私達は聞いて居ないので、折角だからお話を聞きましょうヤ」「サンセイ……」。

そうするとあっさり「ソウダ、ソウダ、サア、ダンサン始めて下さいヤ」とその奥さんからゴーサインが出て漸く私の説明が始まります。このやりとりで、すっかりリラックスした観察会が始まります。もうかれこれ3年位になりましたので、今年の春の観察会でその奥さんに話しかけてみました。

「随分と熱心に勉強されたようですから、今日は奥さんが皆さんに何かお話をされてみては如何ですか。お花でも、小鳥のことも、何でもよろしいと思いますが」。 「サンセイ」の声もあったのですが、その奥さんは突然、声を上げて笑い出してしまった。

「ダサンのお話は耳から入ったら、別の耳からスーッと抜けて行って頭の中に何も残って居りやせん。だけど頭の中がスー、スーして、家に帰っても気持ちが良い。キット、ダンサンの話は耳の奥を掃除して呉れてるんだ。健康に良いと思うから観察会に来ているのサ。それを勘違いして、ダンサンは私にお話でもしてどはと言うたのが可笑しくて」と言いながら笑いコケた。

それと同時に「奥さん！俺たちも似たようなもんだ」と陰の方から声が掛かると、その奥さんは得意満面先頭を切って歩き始める。こんな風景が私は大好きなのです。

私の自然解説を耳の掃除用に愛用している方、それが面白いと、後ろから声掛け専門の方、返って肩身を狭くしている学究派等、人それぞれの集団と共に行動するのが大好き人間に、叱声の程をお願い致します。



Aster ageratoides forma yezoensis

50号発行にあたって

1986年（昭和61年）、第1回ボランティア・レンジャー育成研修会が支笏湖で開催され、修了者の方々によって「エゾマツ会」が発足し（1988年ボランティア・レンジャー協議会改称）1987年（昭和62年）会報誌「エゾマツ」1号が発刊しました。

その後、ほぼ年間4回の割合で「エゾマツ」が発行されてきました。この歴史の中で、体裁や内容も変わってきましたが、継続発行できたことは、会員の皆さんの協力なしには考えられません。

50号を節目に新たなスタートと考え、会員の皆さんのニーズをしっかりと受け止め、編集発行にあたっていきたいと思います。どうか会報誌「エゾマツ」への協力をお願いします。

6月以降の活動

◎7月の森の観察会 集合場所 北海道開拓記念館前

7月1日（木） 10:00～12:00 （下見 6月24日）

◎真駒内自然観察会 集合場所 地下鉄真駒内駅前

7月25日（日） 10:00～12:00 （下見 7月18日）

◎8月の森の観察会 集合場所 北海道開拓記念館前

8月5日（木） 10:00～12:00 （下見 7月29日）

◎利根別自然観察会 集合場所 岩見沢市利根別自然休養林駐車場

8月29日（日） 10:00～12:00 （下見 8月22日）

◎宮城の沢自然観察会 集合場所 市バス平和の滝バス停平和霊園 奥の駐車場

9月12日（日） 10:00～12:00 （下見 9月5日）

◎野幌自然観察の集い

9月26日（日） 10:00～12:00 （下見 9月19日）

集合場所 野幌森林公園 森の自然教室前

会員の声

小樽市 眞壁 脩 司

色々な事情で動きの取れぬまま、レンジャーの方も遠ざかっていました。しかし、佐々木、北原両氏のお誘いで今回観察会を持つことになりました。5月30日、6月2日と下見をし、探勝路の安全と開花植物を確かめ本番に備えました。

気温の高い日が続いたせいか、3日後の6月5日（日）の観察会にはカタクリやエゾエンゴサクは、咲き終わったあとで残念でした。

当日は佐々木、北原両氏のご指導で13名の参加を得、新緑の小路を歩き沢山の植物名を学びました。前半の小雨も止み、積丹半島も望める青空となり、マイズルソウ、クロミノエンレイソウ、優雅なツリバナ、色鮮やかなムラサキヤシオを見ることができ幸せな気分になりました。霧の動きで風の流れを知り、緑の濃淡の中に樹林の構成を知る。そして何より自然の気を戴き、楽しい一日となった事をご報告します。

旭川市 室屋 安 雄

旭川自然観察会は、5月23日、絶好の観察日和に恵まれました。五十嵐さんの作られた観察会のレジメには、三浦綾子の「氷点」から引用した一節が格調高く目に写った。

アキタブキの雄花と雌花を見て感動したのは、私だけだったであろう……。乾燥した道端に2～3mmの穴が数十個。観察の目はそこに集中。はたして誰の住家か……。自然に相應しい一こまであった。

そして、「精英樹」(チョウセンモミ8号)。私もこんな名を貰い、皆から見守られたい。

新会員紹介

今年度も美瑛町白金の「大雪青年の家」で、ボランティア・レンジャー育成研修会が開催されました。この育成研修会修了者で、本会の趣旨に賛同され入会された方々を紹介します。新しい仲間として、観察会や研修会での活躍を期待しています。

新会員の皆さん

北広島市 佐藤 清一 沢部 勝

札幌市豊平区 岡村 敏夫 小林 節子

札幌市西区 宮崎 日吉

札幌市豊平区 岡村 敏夫

或る観察会に参加し、ボランティア・レンジャーの活動を知り、いつか自分もやってみたいと思っていたとき、美瑛で開催された今年度の育成研修会に参加する機会に恵まれました。

研修会では受講の動機を「自然観察の楽しさを自分でも楽しみながら伝えたいなどと、生意気を言っていたのですが、先日初めて下見の観察会に参加して、そんな生やさしいものではないことを実感しました。

今後ともよろしく願います。

札幌市豊平区 小林 節子

北海道に住み始めて、住む土地を知らなくてほど、開拓の村のボランティアに

勉強のつもりで入ったのが、森を知るきっかけでした。

自然の計り知れない知恵、草や樹木のメカニズムに、ただ感心することばかりです。今はほんの入り口をのぞいただけですが、何回も繰り返し教えて頂き、知識として定着させ、子孫に伝えられたらと思っています。もう少し、参加者として、ついていきますので、どうぞよろしくお願いします。

キャンベンスローガン **自然との共存 21世紀に向けて!**

林の中を歩いていると、ビニール袋を持ってキノコを探している人を結構見掛けます。秋の味覚を楽しむキノコ狩りは楽しいものです。

昔、キノコ狩りは竹籠を持っていったそうです。勿論その当時はビニール袋など無かったのですけれども。しかし、昔の人たちは、竹籠の隙間から、しっかりと胞子を土に返す優しい知恵を働かしていたのかも知れません。

ところで、恐竜が存在していた中世代には、高分子の有機物を分解できる菌がいなく、そのために恐竜が減じたのではいかという仮説があります。

植物の遺体を菌が分解すると、炭素と二酸化炭素として大気中に戻します。

しかし、菌が存在しない場合、有機物は分解されずに地上に蓄積されるだけで、空気中の二酸化炭素は減少する一方です。

植物遺体を分解できるキノコなどの菌類は、空気中の組成バランスを整える重要な働きをしているといえます。

恐竜の仮説の真偽はともかく、きのこをこのような観点から捉えてみると、採取の対象だけではなく、自然界における炭素、酸素、二酸化炭素の循環に大きな役割を担っていることを知るべきでしょう。そのことが、自然と共存するキーワードにもなることでしょう。

小樽地区の自然観察

後志支部 北原 武

自分で企画し、自然観察会を開こうなどと、今まで思いもよらなかったが、定年になって、有り余る時間に戸惑っていた矢先でした。

先輩の佐々木幸夫さんとの再開で、「小樽には海だけでなく、美しい自然が沢山あるんだから、自然観察会でも企画しなさいよ。」と、尻を叩かれながらも、その熱意にほだされ、手探りで会を開いて以来、もう5回になりました。勿論、自分一人では無理なので、レンジャー仲間の眞壁さん、佐々木さん、事務局長の佐藤さん等に相談、開催場所の設定、開催日、下見、参加者の募集方法等、のアドバイスを受けて概要下記のように、実施しました。

回数	開催日	開催場所	参加数	レンジャー数
1回目	5月8日	小樽奥沢水源地周辺	10名	2名
2回目	6月5日	オタモイ唐門～小樽水族館	9名	4名
3回目	7月20日	天狗山～穴滝	26名	2名
4回目	8月21日	赤岩山～オタモイ地藏	18名	3名
5回目	9月11日	塩谷丸山	20名	2名

◆実施にあたり心掛けた主な点等

- ・道新、読売、毎日、朝日、各紙の小樽支社に告知を依頼しました。道新以外は、殆ど取り上げてくれませんでした。
- ・下見は、本番前に2回実施、経験を積むと1回でいいでしょうか。
- ・参加者20名以上になると、隊列が長過ぎて遠足気味になりがちでした。
- ・3回目より、1人200円の参加料を頂き、ボランティア保険料、通信費、写真代等に使用しております。
- ・回を重ねるにつれ、2回以上の参加者が多くなりました。

◆今後の課題

- ・小樽地区はレンジャーの人数が少ないので、近隣のレンジャーの応援をお願いしたい。その場合、旅費はどうするのか。
- ・上記に関連するが、名前わからない動植物の確認に苦勞すること。
- ・冬の観察会の実施方法、観察法の学習等。

◆観察会を実施して、感じたこと

参加者は中高年の方が多く、大雑把に2つのグループがあることが分かった。

◎歩くこと（健康の保持）を主な目的とするグループ。

小樽地区の自然観察

後志支部 北原 武

自分で企画し、自然観察会を開こうなどと、今まで思いもよらなかったが、定年になって、有り余る時間に戸惑っていた矢先でした。

先輩の佐々木幸夫さんとの再開で、「小樽には海だけでなく、美しい自然が沢山あるんだから、自然観察会でも企画しなさいよ。」と、尻を叩かれながらも、その熱意にほだされ、手探りで会を開いて以来、もう5回になりました。勿論、自分一人では無理なので、レンジャー仲間の眞壁さん、佐々木さん、事務局長の佐藤さん等に相談、開催場所の設定、開催日、下見、参加者の募集方法等、のアドバイスを受けて概要下記のように、実施しました。

回数	開催日	開催場所	参加数	レンジャー数
1回目	5月8日	小樽奥沢水源地周辺	10名	2名
2回目	6月5日	オタモイ唐門～小樽水族館	9名	4名
3回目	7月20日	天狗山～穴滝	26名	2名
4回目	8月21日	赤岩山～オタモイ地蔵	18名	3名
5回目	9月11日	塩谷丸山	20名	2名

◆実施にあたり心掛けた主な点等

- ・道新、読売、毎日、朝日、各紙の小樽支社に告知を依頼しました。道新以外は、殆ど取り上げてくれませんでした。
- ・下見は、本番前に2回実施、経験を積むと1回でいいでしょうか。
- ・参加者20名以上になると、隊列が長過ぎて遠足気味になりがちでした。
- ・3回目より、1人200円の参加料を頂き、ボランティア保険料、通信費、写真代等に使用しております。
- ・回を重ねるにつれ、2回以上の参加者が多くなりました。

◆今後の課題

- ・小樽地区はレンジャーの人数が少ないので、近隣のレンジャーの応援をお願いしたい。その場合、旅費はどうするのか。
- ・上記に関連するが、名前わからない動植物の確認に苦勞すること。
- ・冬の観察会の実施方法、観察法の学習等。

◆観察会を実施して、感じたこと

参加者は中高年の方が多く、大雑把に2つのグループがあることが分かった。

◎歩くこと（健康の保持）を主な目的とするグループ。

◎植物名を知識として学習するグループ。

凡そ、以上のように、まとめられると思いますが、最後の「……感じたこと」に付いて少々記してみたいと思います。

◎健康保持のグループ

年齢、性別に関係なく、山歩きは好きだが一人ではどうも…、という人が多く、まだ、余力は有るし山にも慣れています。このグループは、観察会にはさほど興味がないので説明等している間は休憩時間になるし、ある程度余裕を持って、山を楽しむことができるように見受けられました。何時も、見慣れている裏山へ、久方ぶりに登って、いい汗をかく事で、解放感にひたり、帰ってからのビールを楽しみにしているのかも知れません。

70歳を越えた方々には、少々無理な山坂であっても、同行の志が、本音で話し合えるよい機会であったのではないのでしょうか。これも、自然の効用のひとつといえるかと思えます。

◎植物名の学習について

休憩等、参加者の会話の中から、「今日は2ツ覚えた」とか「XとYの違いが分かった」等、しばしば聞かれる言葉です。参加者は、観察会で幾つ名前を覚えたかで、会及び担当レンジャーの評価を、暗黙のうちに行っているようにすら感じられます。マテな人は、後から電話で知らせてくれることもあります。

自分が、レンジャーである以上、参加者より幾分かは名前を知っていなかったら、人様の前にはたち難たく思うのは、名前を知らせることが参加者との、接点になっているからでしょう。レンジャーの立場からみても、当日、話すことの大部分は、植物名中心にならざるを得ません。勿論、知らないものも幾らでもあります。人でも物でも、名前を覚えたら、その中身までも理解出来たということになりません。増して高齢になってくるにつれ、人名すら容易には覚えられません。名前を覚えることは、入口部分であるとは思いつつも、自然界の間口は余りにも広いので、何時まで経っても、入口から奥へ進めないことになってしまいます。

何れにせよ、潜在的自然指向派は多い、といわれております。この人達にも呼び掛けて、「自然」に、より多く接する機会を作ることが自然保護を理解する為の近道なのかも知れません。

秋から冬にかけても、観察会を続けて参りたいと予定しています。

ご指導のほど、宜しくお願い致します。

私の一名山

恵庭市 小林 英世

今まさに世は中高年の登山ブーム、あの山この山何処に行ってもおじさんお婆さん、この私も今では中年、山登りを始めて早いものでもう23年になる。創刊号から読んでいる雑誌に、「わたしの一名山」と言う本の紹介が載っていた。ICI石井スポーツ「とっておきの山」大賞作品を集めたものです。ちなみに双葉社発行です。

この本の紹介欄を見ていて、深田久弥の日本百名山を踏破しようとする人の多い昨今本当の山登りとは、自分にとってどの山が『わたしの一名山』なんだろうとふと思い、あれこれ考えてみました。どの山にも深い入れ込みがありまた想いでもあるし、そこで幾つかの項目を考えてみました。

第一に、登った回数が多い、次にアクセスが簡単、次に1600メートル以上あること、次にバリエーションが楽しめる、次に春夏秋冬楽しめる、最後に、下山したあと温泉が楽しめる。以上6つの条件をあてはめる事してみました。そして候補を絞って次の山が残りました。

永山岳、旭岳、黒岳、富良野岳、十勝岳、上ホロカメトック山の6座でした。この中で一番バリエーションの豊富な山として、私の一名山に十勝岳を選びました。

十勝岳標高2077メートル、十勝連峰の秀峰、今も噴煙を高々と上げ活火山としてその名を馳せている。春夏秋冬、美瑛や富良野から様々な顔を見せてくれる十勝岳、この山に何度足を運んだ事だろう。ここで今までに登ったコースを紹介したいと思います。まず、もっともポピュラーなコース、望岳台より避難小屋を経てグランドコースと呼ばれる広々とした砂礫帯を登り頂上を往復する一般ルート。白銀荘から三段山へ登りOP尾根に取り付き、大砲岩を経て十勝岳本峰に登り一般ルートを下り、九条武子の歌碑を通り白銀荘に戻るコース。望岳台から九条武子の歌碑下のフリコ沢を登り、右股沢から十勝本峰を経て一般ルートを下るコース。また、フリコ沢を直登して大砲岩へ抜け本峰を経て一般ルートに下るか、少し足を延ばして十勝岳と美瑛岳の間にあるポンピの沢を下り、望岳台へ戻るコース。美瑛岳を登り十勝岳を経て一般コースを降りる健脚者向きルート。この様に色々なルートを楽しめるのが十勝岳の魅力です。フリコ沢やポンピの沢を上り下りするのに岩登りの特別な道具を必要としないのが良いところでしょう。安全を考えるのであればザイルが一本あれば良いでしょう。この様にバリエーションの豊富な十勝岳ですが、まだ私が登っていないコースがあります。それは新得側からの沢の廻行です。いつしか仲間と登ってみたいものです。

世はまさに百名山ブームであります。山に登っていると、『これで何峰目です。』と良く耳にする事があります。これも一つの登り方かもしれませんが、一つの山をいろんな角度から登るのも楽しいものです。ちなみに温泉が無いのですがバリエーションを楽しんだ山に、芦別岳があります。

話が少し道に逸れますが、私の山仲間元北邦野草園の園長の吉田友吉さんがいます。彼が退官してからの付き合いで、彼の面白い山登りの仕方に感銘し、色々ときき合わせていただきました。なかでも、日本の東西南北最端の山に登る最後の東の山、知床岳に登る時に同行し、三角点に頼ずりをしていたのが今でも甦ってきます。彼は低山を中心に登り、600座以上を登っています。彼のフィールドは嵐山で、ここを拠点に旭川近郊の山々をこごとく登っていました。緻密な計画と行動力で600座以上を登ったのですから大変なものです。また、文献を調べれば少佐の旭川でのスキーコースを再現したりとてもユニークな山登りをする人です。最近では体調が思わしくなく山に登っていないようですが、またいつしよに登ってみたいものです。このように百名山にとらわれることなく、自分で色々計画を立て、私たちが野幌森林公園を春夏秋冬色々なルートで廻るように山も色々なルートを春夏秋冬登ってみては如何でしょう。

話があっちこっち飛んで申し訳ありませんが、ここで一つ提案があります。「えぞまつ」に「私の一名山」のコーナーを作り毎号載せては如何でしょうか。賛同される方執筆をお願いします。



トムラウシ

「私の一名山」原稿募集

小林英世氏の提案は、広報部としても大賛成です。私の一名山は勿論のこと、登山紀行、思い出の山、地元の山、山の情報等々 是非原稿をお寄せ下さい。郵送でもファックスでも結構です。

原稿送り先 〒007-0811 札幌市東区東苗穂町11条2丁目897

TEL・FAX 791-0127

山へのあこがれ

札幌市北区 三 崎 篤

山を歩いていると、つくづく山はいいなあと思う。若い頃は、ひ弱な体を鍛えようと、がむしゃらに登るだけの山行であったが、それが年を重ねるごとに山の深さを感じ、楽しみ覚え余暇の第一を占めるようになった。

登山というからには、やはり頂上にたち達成感を足で確認しないと満足が得られない。つらい思いをして登った結果が明確に現れるからだ。なかなか結果のでない仕事の繰り返し、日常のくすぶりを登山が晴らしてくれる。

私が初めて登った山は芦別岳であった。あれは就職した翌年の夏であった。乏しい給料をはたいて買ったリュックサックとキャラバンシューズで、山部の駅から登山口までの暗い夜道を一人歩いたことを思い出す。夜行列車で仮眠をとっただけであったが、疲れは感じなかった。帰りの列車時刻を気にしながら、ひたすら頂上を目指す気持ちが紛らわしてくれたのかもしれない。頂上は曇りて、最大の楽しみである大パノラマを堪能することは出来なかったが、頂上を極めた満足感、開放感がその後の山のあこがれになったものと思う。

それから40年近く経過したが、10年以上も途絶えたこともあり年数の割りに細々とした登山歴である。したがって、本格的知識・技術には乏しいが、登山を通じて仲間ができ、彼ら、彼女らから、山野草、樹木、野鳥、星、雲のこと、じつに様々なことを教えられ山の楽しみ方が大きく変わってきた。

それまでの登山は、ただ只「山があるから登る」、体力に任せて早く上り早く下る「山登り」であったように思う。屈んでみないと判らない草花や、風の音とともに聞こえてくる鳥の鳴き声を聞き分けるには、ゆったりとした歩き方をしなければならない。いつのまにかそのための歩き方、テンポが身に付きゼイゼイしながら歩くことが少なくなったように思う。

近年、高山植物の図鑑、写真集が数多く出版されているが、色彩は自然条件によ

って異なり、冴えた空気があって、厳しさがあって、雄大な舞台があつてのもので、その舞台に身を置いた者しか良さは判らないし、伝える事も難しい。盗掘した高山植物を買う人は是非ともいちど山に足を運んでほしい。そして彼女たちは山でしか演ずることの出来ないスターたちであるということ確かめて欲しい。

ときおり職場で山の話をして、若い人はもちろん同年代の同僚でものってこない。こんな便利な時代にわざわざ重い物を背負って、牛のようにノロノロと急坂を登り、ひたすら汗をかき、なにがよいのか理解できないに違いない。ゴルフでまぐれにナイスショットをしたときや、ハシゴ酒での健脚ぶをチョッピリ評価してくれるぐらいだ。

最近の若者は綺麗好きとのこと。抗菌グッズが売れ、トイレの手洗いは先ず栓に水を掛けてから使用するらしい。学校ではトイレを使用することが恥ずかしい事でひやかし、いじめの対象になっている事のこと。

土のついた手でオニギリを食べ、冷たい沢水で喉を潤し（最近の沢水もあやしいが）、ひとの目を気にしながらも、雄大な自然の中で用を足す壮快感、もちろん、いちいち手を洗わない、そして学校では学ばない？ことの数々。こんなことを若い人達が体験してほしい。頂上での冷たいビールをご褒美に。



銀泉台からトムラウシそして天人峡花の山旅

恵庭市 小林 英世

7月17日から19日にかけて銀泉台から赤岳、高根が原を通り、忠別岳避難小屋前で泊り、五色岳、化雲岳、を経てヒサゴ沼にベースキャンプを張りトムラウシをピストンし、天人峡へ降りる今回の山行、天気には恵まれず景色は良くなかったが花には恵まれました。

そこで道々目を楽しませてくれた花々を羅列していこうと思います。そこで、北海道大学図書刊行会発行の北海道の花を参考に、色別で掲載します。

まず黄色

エゾウサギギク、ミヤマオグルマ、ミヤマキンボウゲ、シナノキンバイソウ、エゾゼンテイカ、ミゾホウズキ、キバナシャクナゲ、マルバヤナギ、タカネオミナエシ、キバナシオガマ、メアカンキンバイ、ホソバベンケイソウ、ウコンウツギ、ハイオトギリ、

続いて白

イワツツジ、ゴゼンタチバナ、モミジカラマツ、ミツバオウレン、イワイチョウ、チングルマ、シラネニンジン、ハクサンボウフウ、エゾノハクサンイチゲ、チシマアマナ、シロバナノニガナ、ギンリヨウソウ、ヤマブキショウマ、ズダヤクシユ、ナンブソウ、ミズバショウ、ワダスゲ、ウメバチソウ、ギョウジャニンニク、オオウバユリ、ミヤマオグルマ、ウラジロナナカマド、エゾイソツツジ、マルバシモツケ、タカネトウウチソウ、イワヒゲ、イワウメ、タカネスミレ、エゾノマルバシモツケ、ミヤマタネツケバナ、クモマユキノシタ、エゾタカネツメクサ、ムカゴトラノオ、エゾイチゲ、

続いて赤系

ヨツバシオガマ、タカネシオガマ、エゾコザクラ、エゾノツガザクラ、ハクサンチドリ、ウズラバハクサンチドリ、ショウジョウバカマ、クロユリ、エンレイソウ、チシマヒヨウタンボク、ハイマツ、エゾツツジ、チシマツガザクラ、エゾクロウスゴ、ミネズオウ、コケモモ、チシマゲンゲ、コマクサ、ウスユキトウヒレン、

続いて青紫系

エゾヒメクワガタ、ミソガワソウ、ミヤマリンドウ、ミヤマオダマキ、エゾアジサイ、チシマフウロ、ミヤマアズマギク、イワブクロ、ホソバウルップソウ、エゾオヤマノエンドウ、

続いて緑系

アオノツガザクラ、ミヤマハンノキ、エゾノヨツバムグラ、コメバツガザクラ、ウラシマツツジ、

続いて目立たない色の花

ヒメイワショウブ、ショウジョウスケ、エゾハハコヨモギ、サマニヨモギ、レブンサイコ、
以上

約86種類の花を見ることが出来ました。これは後で図鑑を頼りに調べたもの、実際に調べていないので、確実でないと思われかもしれませんがあしからず。まだまだ記憶をたどれば出てきそうですが、不確実なのでやめます。本当は大雪の百花と題したかったのですが、14種足りませんでした。しかし百花繚乱の世界とはこの事なのでしょう。

図鑑で調べているうちに、気になったものが在りましたので書きます。

トウヒレン属 *Saussurea* DC

2年草または多年草で、全く刺針が無い。頭花は単性、散房状または総状につき、総包片はかわら上に並ぶ。花は紫色または白色で、すべて筒状、先は5裂し、花は無毛、葯の基部は尾状となり、花柱の板は間出する。冠毛は2列、外側のものは短く、剛毛状または羽状で落ちやすく、内側のものは常に羽状で宿在する。

主としてアジアの温帯から寒帯にかけて分布し、約400種がある。

ヨーロッパ、アメリカ、オーストラリアにはそれぞれ数種があるにすぎない。日本には約30種あるが、5種が高山性、いずれも多年草。そのうち、北海道や東北地方のものはカムチャッカや千島に、本州中部産の物は低山性の種類に類縁が求められる。

ナガバキタアザミ、ユキバヒゴダイ、オクキタアザミ、ウスユキトウヒレン、ヒダカトウヒレン、タカネヒゴダイ、チャボヤハズトウヒレン、クロトウヒレン、ミヤマキタアザミ、
原色新日本高山植物図鑑 (I) 清水建美 著参考

岩稜帯を歩いていて気になった地衣類が在ったので調べてみました。

アイスクリームをこぼした上に小豆の粒を散らしたような感じの地衣類です。

名前をイワザクロゴケ *Haematomma japonicum*

高山の岩に厚く痂状に固着して、ときによく成長して盛り上がることもある。地衣体背面は硫黄色、粉芽を欠く、子器円盤状で径1mm~3mm数個集まって癒合することもあり、なかば地衣体に埋没し、あるいは地衣体上に押し付けられたようになる。

盤は血赤色、K+暗紫色、髄は白色、K-P-チバリカート酸 ウスニン酸と未検定物質、子器にある赤色物質はアセトン可溶である。

原色日本地衣植物図鑑 吉村 庸 著参考

しかし調べれば限りなく解らないことがどんどん出てくるので此の辺で

山での怖い体験

札幌市東区 田村 允 郁

9年程前の夏のことです。青森県の八戸市に住む甥の結婚式に出席するために青森駅に着いたのは、7月下旬の暑い日の午後でした。

結婚式当日より3日早く青森に着いたのは、八甲田山と岩木山に登ろうと考えてのことでした。

八甲田山は、青森県の中央部、青森市より十和田湖に通じる途中にある山です。

八甲田山は独立峰ではなく、田茂范岳、赤倉岳、井戸岳、小岳、大岳と言ういくつかの山々が連なった総称として呼ばれています。

八甲田山麓のロープウェイを使って歩き始めたのは、午後の2時を回った時刻でした。連山の中で一番標高がある「大岳」の鞍部の小屋についたのは6時を過ぎていました。相当年月の経過した小屋で、小屋の外壁面に2階に上られる階段がついていて、冬期間の雪の多さが想像できる造りになっていました。

夏の時期ですので、誰か同泊者がいてもいいはずなのに、時間が経過しても小屋に入る登山者はいません。

人気がなく、一人で泊まる小屋の前で夕日に映える「大岳」を眺めながらの夕食は大変リッチな気分でした。日が暮れ始め、何もすることがなく早々と寝袋に入り寝てしまいました。

時刻は定かではありません。小屋を揺るがす突風の音で目をさました。しばらく続いた風がハタとやんだのです。とその時です。急に体がしめつけられる異様な感じをうけたのです。手足を動かすことができないばかりか、上半身を上から押さえ付けられているのです。そして、「ガタガタ」と屋根の上を歩き回るような足音が聞こえてきます。恐ろしくて、心臓が張り裂けんばかりです。

どのくらいこのような状態が続いたでしょうか。スーと体が自由になりましたが、何か恐ろしくて寝袋から出ることができません。

あれこれ考えていると、また突風が小屋をゆるがし始めました。体が金縛りの状態になり、恐ろしくて目も開けられません。

このような繰り返りから開放されたのは、何となく明け方の気配が感じられ、金縛りからも開放された頃です。小屋の天井がぼんやりと見え始めます。

意を決して寝袋から這い出し、身の回りの持ち物をザックに詰め込み、小屋を出ます。うすぼんやりとした「大岳」頂上へ向かう急登を、息をきらして登ります。明け方の頂上からの眺望も見る気にもなれず、「酸ヶ湯温泉」の登山口へころがるように下ったのです。

いったい、あの時の体験はなんだったのでしょうか。自然現象だったのか、ねぼけた夢の世界だったのか、はたまた、怖い霊の来訪だったのか、今もってわからないのです。

八甲田は大きく南八甲田と北八甲田に分けられます。北八甲田は鉢を伏せたような形をした山が幾つも連なり、その頂上は火山礫の岩稜帯となり、高山植物が見られます。中腹以下は毛無岱や睡蓮沼という湿原があります。

樹林帯は、ブナ、ダケカンバ、ミズナラ、ナナカマド、ミネカエデなどの落葉広葉樹と、アオモリトドマツなどの常緑針葉樹によって形成されています。





北海道新聞野生生物基金

「モーリー」創刊号

1999. 7. 1 発行

定価 500円

「北海道には数多くの湿原がある。ひっそりとたたずむ山上の湿原もあれば、渡り鳥が羽を休め、人々が水辺で憩う湿原も。そのいずれもが、微妙なバランスの上に存在している貴重な自然の姿だ。目をこらし耳を澄ませば、湿原はわれわれに大切ななにかを語りかけてくれるだろう。」

創刊号「モーリー」の特集「北海道の湿原」の巻頭を飾る一節です。私たちの会で例年実施している「ニセコ神仙沼」観察会も湿原特有の植物を見つけることができる楽しい行事ですし、湿原には何度行っても新しい発見があります。

北星学園大学教授の辻井達一氏は、「……湿原は真正の陸界でもないしそうかどいって真正の水界でもない。つまり水気はたっぷりあるが水面が広がっているわけでもない。そこは特別な生物の住みかである。……」と語っています。

湿原は知っての通り、低層湿原、中層湿原、高層湿原と植物学的に分けられています。低層湿原は土が入りこんでいるため、比較的丈の高い植物が生え、植物の枯れたものが積み重なった高層湿原は栄養が乏しく、限られた植物しか生えないと言われています。

さて、雑誌「モーリー」は、財団法人北海道新聞野生生物基金によって刊行された自然情報誌です。そして、発刊目的を二つ掲げています。一つは財団がどういう趣旨に基づいて活動しているかを伝えること、二つには、北海道の自然や野生生物の現状をこの雑誌を通じてきちんと見直すことだと、前書きに述べられていて、続いて編集の基本を「北海道を、北海道人が、北海道の言葉で語り、伝える」ことだとしています。

マスコットキャラクター「モーリー」から名づけられたこの雑誌の次号以降の発行を楽しみにしていきたくものです。

もみじ

札幌市 川端 功治

紅葉も、黄葉も、もみじと読む。お隣りの中国では、黄色を尊び、高位高官の纏う衣服は、好んで黄色とし、時には平民が着用することを、禁じた時代もあったと言う。秋の野山を彩る樹木や草木は、圧倒的に黄色が多い土地柄の中国は、詩歌史書に黄色が大いに称揚された。その文化が日本に伝来して、大きな影響を与え、黄色が全て良しの風潮は、もみじにまで及び、「もみつ」と言い「黄変つ」と書いた。ここから名詞の「もみち」が生まれ、平安時代になって「もみじ」になったとされている。

日本の秋の紅葉風景は、赤い木の葉が混じってこそ、多彩を極める。赤い絹布を「もみ」と言う。ベニバナを揉（も）んで、無地の絹を、紅色に染めたことから、「もむ」と言う動詞を名詞化して、「もみじ」となったとする見方もある。

ところで欧米への旅行者が伝えるところによれば、もみじを、デット、リーフ（死んだ葉）と呼ぶのに驚かされたことが、ままあったと言う。

フランス人の持つ哀感を歌い続けたイブ、モンタン氏のシャンソン「枯れ葉」は切々と世界の人々の胸を打った。しかし、此の枯れ葉は日本人の喜ぶ「もみじ」では無く、正しく「デット、リーフ＝死んだ葉」の感触であろう。映画「第三の男」のラストシーンも、男女間の絶望的な離別を暗示する墓場の木立は、枯れ葉が一杯であって、所謂「もみじ」のムードとは別の世界である。

これらの事から気がついた事は、単色でスケールの雄大な国々と、複雑で入り込んだ地形に、多種多様な錦絵を繰り広げた様な「もみじ」の国との違いに依るものと思う。しかしながら、外国風に冷めた見方をすれば、美しく老いた枯れ葉とも言える。

私たちの終生の願い事は、美しく老いたい、と言うことにあるとすれば、正しくそれを地で行ったのが「もみじ」ではないか。春から秋まで、一日中働きずく

めの樹の葉に、餓首宣言の予告がなされる。そのきっかけは、最低気温が8℃以下に下がり、日照時間が減少すると、植物ホルモン、「エチレン」が生成されて更に老化を促進し、葉内のタンパク質等の養分が、幹の方へ転流される。そして葉緑素（クロロフィル）が分解され、消失するので緑色が消え失せる。

この頃になると葉柄細胞にもエチレンが生成され、枝との接点に縁切の為の離層を作り始める。言わば餓首装置であって、完成すれば樹の葉の生命は断たれ、枝から切り離されて散っていく。これが落ち葉であり、枯れ葉、死んだ葉（デットリーフ）である訳だ。

緑色のクロロフィルが、8に対して黄色の色素（カロチノイド）が、1の割合で含まれているから、クロロフィルの緑が消え失せるとカロチノイドの黄色が残って「黄色」の「もみじ」となる。ニンジンのカロチンと卵黄のルテイン等を含むグループである。それから移送されなかった葉の中の糖分から、赤色を発色する（アントシアン）の仲間の（クリサンテミン）が特に真紅に染め上げる。

タンニン系の物質（フロバフェン）が発色すると褐色または赤褐色になる事も忘れてはならない。以上の色素が、様々な割合で混じり合い、更に斑らに分布すると複雑な模様となる反面、各色素が破壊消失すると、殆ど半透明に近い葉が現れ、そのメカニズムの複雑さに音を上げる。やはり専門の化学者の解説を受けたものである。

全山是錦。嘆声が漏れる様な「もみじ」のピークは最低温度が5℃から6℃とされている。勿論空気が澄んでいる事、葉が十分に日光を受けていて、日中は温暖で夜間は急激に冷え込むことが必要である。

紅く「もみじ」するのは、ハウチワカエデ、ヤマモミジ、ヌルデ、ナナカマド、ニシキギ、黄色に「もみじ」するのは、イチョウ、イタヤカエデ、ニセアカシヤ、プラタナス、褐色に「もみじ」するのは、カシワ、ミズナラ、コナラ、クリ、トチノキ、ブナ等。尚、カエデ類、サクラ類、ブナ類は樹冠の内部から色づき始めると言われているのは、春の開葉の順に従っているからである。即ち古くなった葉から「もみじ」と言うことである。

秋風が立つと、家の周りの落ち葉掻きに追われて、かき口説く人。せっせと掻き集めて堆肥に積んで、菜園や庭木に施肥に活用する人、人それぞれであるが、厄介者扱いにされるよりは、生活のお役に立っている話の方が楽しい。

旧聞になるが、平成5年7月26日付けお北海道新聞で報道された「枯れ葉のお手柄」は嬉しい話題であった。古老の言葉に、枯れ葉には解毒作用があると言う、言い伝えが実際に立証されたことである。小樽で倒産したメッキ工場が、使用した水銀液から出た高濃度の6価クロムで汚染された土地を放置していた。人体に取り込まれると、鼻腔欠損症、癌（皮膚、肺、肝臓）の生地獄となる。硫酸鉄で無害化が出来ても、化学反応で出来た2次物質が、別の汚染物質となるにすぎない。

北海道工業大学の渡辺紀元教授は「カシワの枯れ葉」の粉末水溶液を、半年間10回に分けて散布したところ、遂に安全基準値以内に下げること成功したと言う。どんなメカニズムが、どのように作用したのか判りかねるが、枯れ葉には肥料として立派な効用がある他、上記のような汚染浄化作用があり、更に期待してよい何かがあるような気がする。これは漠然とした思いつきではあるが、枯れ葉を絶縁した親元の樹は、自分の根元に枯れ葉が戻って来るのを期待して居るのではないかと思うことがある。勿論、自分の葉にこだわらない。同族でよし、他族でよし、極端な事を言えば樹の葉であれば、何でも良いと言う程、生理的に必要としているのではないだろうか。

自然界の複雑な仕組みを人間達が攪乱しているのではないか、と言う不安が常に付き纏う。「もみじ」から「枯れ葉」へ。知りたい事は数限りなくある。それは例え遙かなる道程であっても、辿らなければならない道程であろう。

- 参考引用
- ・岩波国語辞典
 - ・朝日百科植物の世界 他

キーワード



ユキムシ

紅葉の季節から次第に晩秋に近づく頃、冬の訪れを告げる虫として、ユキムシの飛ぶ姿を見ることでしょう。

腹に縮をつけたこの虫が、風のない晩秋の空を飛ぶと、まもなく初雪が降り始めます。このユキムシの本名は「トドノネオオワタムシ」と名付けられています。

晩秋に飛ぶユキムシは「子ども」を生み落とすため、トドマツからヤチダモへの移動の姿です。このユキムシの中にはオスはいません。ユキムシは交配せず、卵ではなく、直接子どもをヤチダモの樹皮がめくれたり、ささくれたところへ生み落とします。（生まれた子どもは、約4頭の小さなオスと、それよりやや大きめのメスです）

このように交配せずにメスだけで子どもを産む単為生殖はアブラムシがいますが、アブラムシはアブラムシ科であり、ユキムシはワタムシ科に属しています。

子虫は口を持たず、親から与えられた栄養で生命を維持します。この子虫は4回の脱皮を行った後、成熟して交尾を行います。成熟してから1週間ほどしか生きられません。

交尾を終えたこの世代のメスは幼虫ではなく、卵を生み落としますし、どのメスもたった1つしか卵を持っていません。この卵は冬の眠りに入ります。

越冬した卵は4月下旬にふ化します。越冬から産まれるこの世代は「幹母」と呼ばれ、メスばかりです。この幹母はヤチダモの芽の基部に定着して汁を吸い、成長していきませんが、幹母の体内には卵ではなく、たくさんの胚子（成長中の子ども）が詰まっています。この胚子の中にも極めて小さい胚子が成長を始めています。

幹母はヤチダモの芽が伸びる頃、幼虫を産み、その幼虫は新芽に移っていきます。この幼虫は6月下旬ごろ、ユキムシの姿になり、人知れずにヤチダモを離れ

トドマツに移っていきます。

ユキムシはトドマツの根際に移動して、ここでもメスだけで子どもを産み、その子どもはトドマツの根際から地中へ潜りこみ集団を作ります。

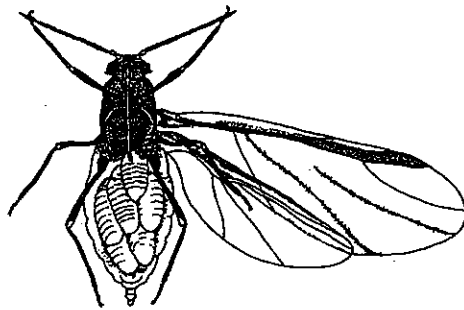
こうしてできあがったトドマツの集団は翅のない個体をメスだけで産み続けます。そして、3・4世代が根で経過すると言われています。

秋が近づくと根で産まれた子どもたちは翅を持つ個体へと成長していき、晩秋の絶好の日にヤチダモに向けて飛び立っていくのです。

ユキムシは、ヤチダモとトドマツの二つの木が生えていなければ生活できません。ですからユキムシにとって望ましい環境はヤチダモとトドマツが隣り合っているような場所なのでしょう。

冬の訪れの風物詩、ユキムシの飛ぶ時季、複雑な生活史を繰り広げる姿をこのような視点で見るのもおもしろいでしょう。

(札幌文庫52 札幌昆虫記 「雪虫」の項を要約しました。)



観察会研修会 情報

《平成11年度（10月～1月）開催・協力予定の自然観察会》

◎秋の森の観察会

10月17日（木） 9：30～14：00 （下見 10月10日）

集合場所 野幌森林公園大沢口 （昼食を用意してください）

◎野幌森林公園ありがとう観察会

11月14日（日） 10：00～15：00

集合場所 野幌森林公園 森の自然教室 （昼食と軍手・ゴミ袋用意）

◎12月の森の観察会

12月2日（木） 10：00～12：00 （下見11月25日）

集合場所 北海道開拓記念館前

◎1月の森の観察会

1月13日（木） 10：00～12：00

集合場所 北海道開拓記念館前

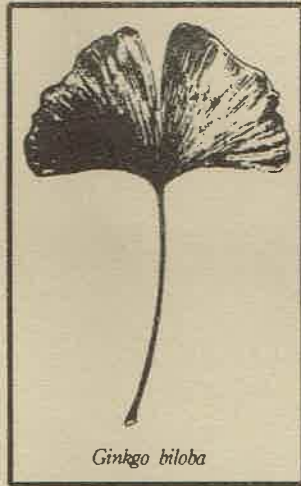
会員の参加協力で観察会を充実させましょう！



■■■■■■■■■■ 編 集 後 記 ■■■■■■■■■■

- ◆本誌が50号を発行することが出来ました。これもひとえに会員の皆様の本誌に寄せる協力があったからだと思っています。この節目を新たなる出発点として、広報誌作りに取り組んでいきます。
- ◆真夏日の続いた今年の夏の影響を受けたのか、木々の紅葉も例年に比べて、遅いようです。長い冬の営みの前の一時の華やかな森を観察していることでしょう。その観察結果をデータ化し、会員相互で交流をしていくと、会員の輪が一層広がっていくことでしょう。
- ◆会の活動の活性化が論議されて久しく、会員のニーズをどう具現化するかが大きな課題となっています。課題解決の前提は、個々人が本会にどう関わっていきたいのか率直な声をだしていただくことだと思っています。
- ◆本号は、山をテーマに特集を組んでみました。会員の中には、登山を趣味にしている方が沢山いらっしゃるでしょう。「エゾマツ」を通じて、登山の情報を交換してみてはいかがでしょうか。

北海道ボランティア・レンジャー協議会
会報誌「エゾマツ」50号 1999.10.20 発行
発行責任者 大友 健
(表紙絵 広報部 三崎 篤)



Ginkgo biloba